

在日コリアンの文化的実践とアイデンティティ：生野民族文化祭に着目して

金子, 真紀
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/2344796>

出版情報：九州人類学会報. 42, pp.53-67, 2015-06-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

在日コリアンの文化的実践とアイデンティティ —生野民族文化祭に着目して—

金子真紀（九州大学大学院人間環境学府 教育システム専攻博士後期課程）

キーワード：アイデンティティ，実践コミュニティ，生野民族文化祭，権力作用，差異化

I 序章

1 研究の問題意識・背景

修士課程での研究は、博士課程までを含めた長期的な研究を前提におこなった。現在の在日コリアンの若者のアイデンティティと文化的実践の関係を見ていくことが博士課程までの目的である。そのためにまず、修士課程では 80 年代からはじまった在日コリアンの人々による民族・民衆文化運動の調査を行った。その中でも特に重要だと思われる「生野民族文化祭」に着目した。これは、大阪市生野区で在日コリアン 2・3 世たちが中心となって 1983 年から 2002 年まで行った祭りである。「ひとつになって育てよう 民族の文化を!こころを!」というスローガンのもと、失われつつあった若者の民族的自覚を養い、民族の連帯を取り戻すことを目的としていた。祭りは生野区内の公立の小中学校を転々と周りながら開催され、出演者は原則、在日コリアンのみに限定されていた。祭りでは舞踊やマダン劇、プンムル(農楽)などが行われ、前日には生野区全体をプンムル隊が練り歩き、祭りを盛り上げた。生野民族文化祭をきっかけに、全国様々な場所で在日コリアンの人々が主催する祭りが 100 以上も開催された。この祭りは在日コリアンの人々の祭りの始まりであり、在日コリアン社会や日本社会に様々な影響を与えた祭りである。そのためこの祭りを検討することは、在日コリアン 2・3 世をはじめ若者のアイデンティティ構築を、また在日コリアン社会を理解する上で重要であると考えている。

2 本論の研究目的・研究意義

本研究では、20年間にわたって開催された生野民族文化祭に着目する。先行研究において、生野民族文化祭は民族の連帯を取り戻し、ネガティブに見ていた民族性をポジティブに変えることのできた活動として、また在日コリアン2・3世が民族的アイデンティティを模索する場として取り上げられてきた。しかし、先行研究では個人の差異や多様性が見えにくくなっており、どのようにアイデンティティを構築していったかについては十分に明らかになっていない。以上をふまえ本研究では、生野民族文化祭に参加することで、在日コリアン2・3世たちはいかにアイデンティティを構築してきたのかを明らかにしていく。

そのためには、生野民族文化祭がどのような実践であったかをみていく必要がある。したがってまず、在日コリアンたちの前史をみていき、生野民族文化祭がなぜ行われたのか、歴史的な文脈から考察する。次に、生野民族文化祭の変遷をインタビューやフィールドワークをもとに整理し、彼らが行った生野民族文化祭とはどのような実践であったのかを社会的文脈からみていく。そして最後に、実践コミュニティ¹⁾の視点から生野民族文化祭を考察し、本研究の目的を達成させる。

生野区という小さな地域での実践ではあるが、現在でもその実践から波及した在日コリアンの祭りが様々な場所で行われている。現在の在日コリアンの状況、アイデンティティを紐解くには、在日コリアンの人々の中でも大きな転換期であった生野民族文化祭を考察することが必要であると考えている。またすでに終わった祭りであるが、筆者のインタビューにおいて「10数年経った今だからこそ語れる」と述べられたように、現在だから記述できる生野民族文化祭

1) 「実践コミュニティ」はレイヴとウエンガー（1993）が提唱したもので、彼らは知識や技能の習得は行為者がコミュニティへ参加することで実現する考える。これまでの師弟関係間の一方向的な流れの中で学習を捉えるのではなく、コミュニティに参加し、コミュニティ内の相互行為を経て徐々に周辺から中心へと進んでいくという新たな学習過程の捉え方を提唱した。彼らはその過程を「正統的周辺参加」と呼んだ。本研究ではそのモデルを展開させた田辺（2002・2003）のモデルを使用している。田辺が提示する実践コミュニティとは、権力関係のなかで、人々の相互行為によって、協働したり差異化したりしながら実践が生まれる集団である。人々はその実践コミュニティの中でアイデンティティを構築させていく。

の歴史があるのである。生野民族文化祭を在日コリアンの歴史において連続したものと捉え、彼らの変化を詳細にみていくことが重要である。奪われた民族性を取り戻すための運動というだけの位置づけや、一実践としての解釈にとどまらず、在日コリアン社会内や日本社会への影響をダイナミックに捉えていく。

3 先行研究

在日コリアン研究はこれまで数多く行われてきている。特にアイデンティティに関する問題は多く、さまざまな視点から研究されている。

80年代から90年代における在日コリアンの若い世代のアイデンティティについて調査、研究を行った福岡は、他のアイデンティティに関する論文でも引用されることが多い。福岡は、在日韓国・朝鮮人という枠組みでしか捉えられてこなかった在日韓国・朝鮮人の若者の意識の在り方の多様化を指摘している。同化志向と異化志向という単純な二項図式ではおさまりきれない、在日韓国・朝鮮人の若者を調査で明らかにしている。福岡は新たに、若者のアイデンティティ構築の5つの分類枠組み²⁾を作成し、「マージナル・パーソン」として在日韓国・朝鮮人の若者を捉えている [福岡 1993]。

また、金は在日朝鮮人のエスニシティのなかに現代社会におけるアイデンティティをめぐる歴史と現状のダイナミズムを捉えている。具体的に、大阪府高槻市で地域の子どもの非行問題や、行政問題などに取り組む「むくげの会」の子ども会活動に着目している。そこに所属する一人の女子学生の名前の変更による葛藤やアイデンティティを検討し、彼女の名前の変更の過程に、「在日朝鮮人としての自分」と「ありのままの自分」のあいだに折り合いをつけていこうとしている姿を金は捉えている。マイノリティの人々は自らを解放するために手段としてアイデンティティ・ポリティクスを利用してきた。しかし、金は

²⁾ 福岡が示す5つのタイプとは、日本人とともに生きられる社会実現を目指す「共生志向」タイプ、同化せず、「在外公民」として生きていく「祖国志向」タイプ、自己の実現、確立を目指す「個人志向」タイプ、「日本人」になることを目指す「帰化志向」タイプ、そして「共生志向」と「祖国志向」の間に位置する、同胞のためのよりよい社会をつくることを目指す「同胞志向」タイプである。それらのタイプをさらに、民族意識への強弱、同化意識への強弱という一次元図式に還元している。

その内部の多様な存在を抑圧していると指摘し、内部にはささやかな抵抗や「柔軟なアイデンティティ」ともいうべき、アイデンティティの在り方の可能性があるのではないか述べている。人々は自らの位置を状況対応的に定め、複数世界を往来しながら生きており、柔軟で弾力性のある「選択」といった生きるための戦術を日々の生活のなかで編み出しているのである [金 1999]。

生野民族文化祭が開催された当時の若者を知るうえで、福岡が提示したアイデンティティの枠組みは在日コリアンのアイデンティティ論の可能性を広げた。また、金が指摘するような、アイデンティティ・ポリティクスを超えたものとして、今まで見落とされてきた現象をも個人が社会に対して行う戦術として示した点は、在日コリアンのアイデンティティをみていく上で新しい視点である。

このようにアイデンティティの問題に言及した研究の他に、本論でとりあげる生野民族文化祭そのものや、80年代に生野民族文化祭からはじまった在日コリアンの人々による民族・民衆文化運動を取り上げている研究も多数存在する。

80年代～90年代におこった民族文化祭を取り上げ、調査している飯田はそれらを総称して「祭り」としている。彼は、多数の在日コリアンによる祭りを比較検討することで、その特徴を挙げている。「祭り」を通して民族は象徴として実存し、そこには聖性と曖昧性を帯びている。それにより、在日コリアンの人々の民族イメージはネガティブなものからポジティブなものへと変わり、在日コリアンの若者は共通の「民族」体験から連帯感、新たな民族的自己意識をもつようになった。そして、その「民族」象徴の曖昧さから、「ワン・コリア」「統一」などのユートピア性が現出しており、文化祭には多くの人々が参加可能となったのである。「生野民族文化祭」の影響ではじまった、在日コリアンの人々の民族祭りは、全国に広がるにつれて徐々に「共生」というテーマが色濃くなり、メディアなどの影響によって、「公共化」も起きていると指摘している。また、これら「民族祭り」は、70年代におきた在日学生運動の「韓国民主化や民族運動の『政治主義』の行き詰まりに対して、『文化運動』への転換がおこり、その1つの解答」ではなかったかと分析している。「生野民族文化祭」については検討が必要であることは述べているが、在日コリアンたちの活動を政治的な

ものから文化的なものへの転換として捉えている [飯田 2006]。

また稲津は、在日韓国・朝鮮人運動のカルチュラル・ターンとして生野民族文化祭を取り上げている。この民族文化祭は、在日であるという「負」を克服し、在日であることを「正」と捉えるための「闘い」の運動として、また、民族的アイデンティティを〈楽しく〉求める運動として始まり、「生野民族文化祭の取り組みは『民衆』の立場から、それまでの組織中心だった運動や、差別的意識の強い日本社会に対する〈民族文化〉による政治を行った運動であった」（稲津 2007：8）と、ここに在日運動の「カルチュラル・ターン」を捉えている [稲津 2007]。

以上のように在日コリアンのアイデンティティの多様性や、生野民族文化祭の運動としての位置付け、在日コリアンの人々にとっても重要な実践であったことは先行研究でも明らかにされている。しかし、これまで生野民族文化祭の20年という変遷と、その実践に参加することでいかにアイデンティティが構築されていったかという、構築の過程については十分に明示したものはない。本修士論文では、在日コリアンのアイデンティティに関する先行研究をふまえ、生野民族文化祭の変遷をより詳細にみていきながらその点を考察していく。

II 実践で構築されるアイデンティティ

本修士論文の第1章では、本論で用いるアイデンティティ概念の検討を行った。特に、スチュワート・ホールが提唱する概念を検討した。彼は、アイデンティティは完結せず、変化するものであり、「アイデンティティ化」という過程が重要であるとしている。彼の言うアイデンティティ化とは、他者との関係の中で、排除されていることを意識したり、また排除されていることを自己の中で打ち消すという選択の可能性を持ちながら、自己の位置取りを選ぶことなのである [ホール 1999]。

そして彼はさらにマイノリティのアイデンティティを理解する上で、二つの政治学を提起する。「アイデンティティの政治I」と「差異のアイデンティティ

の政治」である。「アイデンティティの政治 I」は、自分たちを周縁化する社会に対抗して作られる、防衛的な集合的アイデンティティの形成に関わるものである。それは自らのルーツを見だし、それをよりどころとする。しかし、この政治 I は内部の差異や多様性を覆い隠してしまう。そこで、「差異のアイデンティティの政治」、つまり唯一のアイデンティティをもっているのではなく、多重のアイデンティティをもっていることを認める政治学、を彼は提示する。ホールはこの 2 つを折衷させることの重要性を強調しており、この 2 つが互いに関係し合い、変容していく過程がマイノリティのアイデンティティ化であるとした [ホール 1999]。

次にレイヴとウェンガーが提唱した「実践コミュニティ」モデル [レイヴ & ウェンガー 1993, ウェンガー 2002] を批判的に発展させた田辺の実践コミュニティ理論を検討した。田辺はレイヴとウェンガーの実践コミュニティモデルに対し、外部などからの権力作用が考慮されていない点、実践の中で人々が差異化していくベクトルが描かれていない点を指摘している。それらから、田辺が考える実践コミュニティとは、権力関係のなかで、人々の相互行為によって、協働したり差異化したりしながら実践が生まれる集団である。人々はその実践コミュニティの中でアイデンティティを構築させていく [田辺 2002,2003]。

田辺が想定するアイデンティティとは「アイデンティティ化」、すなわち「権力関係のなかで自らの位置を占有し、自分の生を求めて自分であることを承認する過程」[田辺 2003 : 235-236] を経て構築される主体のあり方なのである。人々はコミュニティに参加し、さまざまな権力関係が作用する中、他者と交渉、協働しながら他者との差異化を自覚し、実践していくことで、多様なアイデンティティ化が展開していくのである。

以上をふまえて、本論ではホールと田辺のアイデンティティ概念を参照し、アイデンティティとは生き方を求めて世界に自らの位置を占有していき、自分を承認していく過程を経て生まれ、変化し続けるものとした。

Ⅲ 在日コリアンの前史

本修士論文の第2章では、在日コリアンの歴史的文脈から、彼ら／彼女らがなぜ生野民族文化祭を開催するに至ったのかを考察した。まず要因の一つとして、生野区という在日コリアンが多く居住している場の特殊性が挙げられる。生野民族文化祭が開催できたのは、生野区に圧倒的な数の在日コリアンの人々がいたからである³⁾。日本の植民地化政策によって職を失った多くの在日コリアンの人々が、日本に働き場を求めて来日した。しかし、戦後の混乱の中、政治的、経済的な問題によって朝鮮半島に帰国できず、日本に定住を余儀なくされた。大阪は特に働き場があり、戦前から猪飼野(生野区)⁴⁾も平野運河開削工事などで多くのコリアンを雇用していた。そのため猪飼野に多くのコリアンが定着していったのである。

次の要因として、在日コリアン内の対立による民族の分断が挙げられる。現在でも民団(在日本大韓民国民団)と総連(在日本朝鮮人総連合会)が在日コリアン社会を二つに分断している。しかしこの2つの団体は政治性が強く、組織運営等も不透明であったため、在日コリアンの人々は不信感をつのらせていった。それに抵抗する勢力として青年たちによる新しい運動体の流れとネットワークが誕生した。そのメンバーの多くが生野民族文化祭に関わっていたことから、その運動の流れが生野民族文化祭をはじめとする、民族・民衆文化運動へと向かう要因の一つであったと考えられる⁵⁾。

そして最後の要因として、韓国の軍事政権下に行われた、民衆文化運動の影響を述べた。韓国での学生たちの活動に共感し、共有したいと考える在日コリアンたちによって「マダン劇の会」が発足した⁶⁾。彼らは、韓国の学生たちが行

³⁾ 現在の在日コリアンの人口は約52万人(2013年12月 法務省)となっている。特に大阪府に多く、約11万8千人(2013年12月 法務省)が居住しており、東京都3よりも多い数値となっている。その中でも生野区は「外国人登録者数総数上位100自治体(2013年12月 法務省)」で新宿に次ぐ2位となっている。新宿区はニューカマーと言われる人々が多いが、生野区はオールドカマーが多く、済州島にルーツを持つ人々が大多数を占めている。

⁴⁾ もともと猪飼野と呼ばれていたが、73年にいくつかの新しい町名に置き換えられ、現在では在日の人々が多く居住している地域を、総じて生野と呼ぶ人が多い。

⁵⁾ [玄 2014: 44-50] 参照

⁶⁾ 『アリラン峠』のパンフレットにおいて、「私たちがなぜマダン劇をやるのか。第

った実践を共有することで、自分たちの民族性を解放し、日本社会からの疎外へ抵抗しようとしたのである。そしてその活動は、生野民族文化祭に接合していった。以上のような歴史的な文脈の中で、生野民族文化祭は開催されたのである。

IV 在日コリアンたちの生野民族文化祭

本修士論文の第3章では、生野民族文化祭の20年の変遷を検討した。生野民族文化祭が開催された80年代において、在日コリアン2・3世はちょうど10代から30代の若者であった。1世とは違い、生まれも育ちも日本である2・3世にとっては言語などの問題もあり、80年代当時、日本定住を選択するしかない状態であった。しかし、自分たちの民族性をマイナスなものとして隠して生きていくことへの苦しみ、また在日コリアン内の対立によってもどかしさがつのる一方であった。その中で、これまで実現できなかった、既存のコミュニティを横断し、包括するような新しいコミュニティ、新しい実践を行うコミュニティが彼らには必要となった。そして誕生したのが生野民族文化祭である。

創成期において、民団と総連の反発や、会場確保における地域社会に住む日本人からの反発などの問題が浮上した。それらを乗り越え、第1回目の生野民族文化祭(1983年)は開催された。また、生野民族文化祭の特徴として、在日コリアンのみしか出演できないというこだわりがあった。しかし、その状況によって民族性を解放させることができ、生野民族文化祭が在日コリアンの人々にとって欠かせない祭りとなっていった。

第10回目から第14回目になると世代交代が行われ、第1世代⁷⁾は一線を退くこととなる。この転換期においては、世代間の意見のすれ違い、祭りの捉え方

一に、七〇年代韓国でおこり全国各地の民衆のあいだに広まった『マダン劇運動』を、同時代に生きる同じ民族の一員として、共有したいから」[梁 1985: 45]と書かれてある。

⁷⁾ 生野民族文化祭に参加した人々は、第1～3世代に区切ることができる。第1世代は1回目から約14回目まで、第2世代は約5回目から20回目まで、第3世代は最後の方に関わった人々である。

の違いが顕著になっていた。第1世代の人々は、他のコミュニティを巻き込んだり、出演者の枠を広げるといった、次のステップへと進む必要性を感じていた。しかし、第2・第3世代にとってこの祭りは在日コリアンのものであるという意識が強かったのである。

そして第14回目以降、祭りが行われていた時期も後半になると徐々に祭りを続けていくことの困難さを感じるようになった第2・第3世代は、第20回目で生野民族文化祭を終えることにした。その要因として大きく3つがあげられる。まず一つ目は、継承していくことのつらさである。実行委員会も縮小傾向にあり、中心を担う人々にとって開催することが重荷になってきたのである。二つ目は、生野民族文化祭でなくても、楽器演奏や舞踊を披露できるようになったという、文化祭が今まで担っていた役割を終えてしまったことである。そして三つ目は、在日コリアンの祭りということへのこだわりによって他のコミュニティを巻き込むことができず、開かれた新たな実践を生みだせなかったことである。また他にも、在日コリアン内の出自の多様性や中心を担う生野区の若者の減少も生野民族文化祭が終わる要因であった。このように生野民族文化祭は創成期、転換期、終結期という変遷を経て終わったのである。

V 生野民族文化祭が与えた影響

本修士論文の第4章では、以上みてきた歴史的な文脈と生野民族文化祭の変遷をふまえて、在日コリアン2・3世代たちが祭りの実践コミュニティに参加することで、どのようにアイデンティティを構築させていき、自分の生き方を見いだしていったのかを考察した。まず生野民族文化祭を実践コミュニティの関係から捉え直した。生野民族文化祭の実践コミュニティでは、さまざまな権力関係⁸⁾

⁸⁾ 実践が行われる背景には権力関係が存在する。なぜなら「権力関係は日常生活の実践のなかで複合的に作用する力の諸関係」[田辺 2003: 232]だからである。つまり、私たちの実践は全て権力関係のもとで行われるのである。ここでの権力関係は強制や抑圧などの国家権力のような装置だけを意味しない。家族、友人などによる人間関係をも含めた、権力の網の目でもある。

を背景に、多様な構成員が交渉⁹⁾を通して、また協働を行いながら実践を生みだしていた。手伝いとしてカメラマンや研究者など多くの日本人がこの祭りに関わっていたため、構成員には日本人も含まれる。彼らとの交渉、協働も在日コリアンの人々にとって重要なものであった。筆者のインタビューでも、「手伝ってくれた日本人がいたからこそその祭りであった」と述べられた。このように、在日コリアン同士はもちろん、日本人とも協働しながら、実践が生み出されていたのである。

しかし一方、交渉を行う中で、様々な他者との差異化を自覚していく在日コリアンたちもいた。第1世代、第2世代、第3世代の世代間の葛藤は、交渉によって徐々に生野民族文化祭という実践の意味の合意が行われず生じた、差異化の方向性であると考えられる。それは、第3章で述べたように、世代間の意見のすれ違いや、祭りの捉え方の違いによって、抵抗や葛藤が生じ、第1世代が第一線を退いたことからよみとれる。また、世代間だけではなく、生野民族文化祭に参加したことで舞踊や楽器をより極める道へと、自分の生き方を他へ見だし、実践コミュニティの外部へと向かう人々もいた¹⁰⁾。

それらをふまえ、生野民族文化祭における在日コリアン2・3世のアイデンティティを理解するために、ホールの2つの政治学を用いた。その結果、ポジティブな意味で「在日コリアン」として再表象していく過程と、差異化などにより多様なアイデンティティ化が行われていたという過程の、2つのアイデンティティ構築過程を考察した。この2つは互いに関係しあいながら、不断に変容する。

生野民族文化祭が行われる以前の2・3世は、日本人と「在日」という狭間や、

⁹⁾ ウェンガーによれば交渉とは、コミュニティ内での出来事や発話などの相互行為をとおして、実践に正統性や意味を持たせることである。それはコミュニティ内部へ向かう帰属意識を基盤としていた[ウェンガー 1998]。しかし、それに対して田辺は交渉から他者との差異化を自覚し、抵抗や葛藤が生まれるといった、差異化の方向性が考慮されていないと指摘している[田辺 2003]。本修士論文では、この差異化を含んだ「交渉」を採用している。

¹⁰⁾ 「コミュニティのなかで他者との実践に従事しながらも他者との差異化を自覚し、自分の生き方を実践していくことによってアイデンティティ化は多様に展開する可能性がある」[田辺 2003: 236]と田辺は述べており、生野民族文化祭においても、多様なアイデンティティ化が展開していたのである。

他にもさまざまな境界から包括されたり、疎外されたりして葛藤を抱いていた。そんな不安定な状況の中で、日本社会の政治的、社会的勢力、また差別や排除によって形成されたカテゴリーである「在日」というネガティブな表象を2・3世の人々は受け入れることができなかった。また受け入れようにも日本人ぶって生きていかなければならない社会状況があった。それはアイデンティティ化が上手く行われていない状況をさしている。しかし、生野民族文化祭という実践コミュニティに参加することで、在日コリアンをポジティブな形で再表象し、在日コリアンである「私」を「私」として承認していったのである。また、祭りを実践コミュニティの視点で捉え直した際に見たように、差異化していく人々がいた。そこから2つ目の過程が読み取れる。彼らは、生野民族文化祭に参加することで、2つのアイデンティティ構築過程を経ながら、自らの生き方を模索していた。そしてそれは、各々の次の実践コミュニティへの参加へと繋がっていくのである。

そして最後に、この生野民族文化祭がどのように次世代に影響を与えているのか、現状と課題もふまえて考察した。民族・民衆文化運動によって教育現場が変わり、またこの運動を経験した2・3世が親世代になったこともあり、民族文化に触れる機会の増加や在日コリアンである自分を表に出せる環境が少しずつできていった。しかし、現在でも差別が残っており、在日コリアンであることへの葛藤が存在していた¹¹⁾。日本人と在日コリアンとがよりよく生きていくための社会を構築していかなければならないことが示唆できる。

VI 終章

歴史的な文脈と生野民族文化祭の変遷から、実践コミュニティとして生野民族

¹¹⁾ 「在日コリアンへのヘイトスピーチとインターネット利用経験などに関する在日コリアン青年差別実態アンケート調査報告書（最終報告）」実施者：在日コリアン青年連合〔KEY〕、井沢泰樹（金泰泳）（2013年）。ヘイトスピーチによって、傷ついた経験のある人は78.2%、インターネットの書き込みによる月1回以上差別を経験する人は64%であった。この調査への回答数は、203名と少なく、かつこのような支援機関にアクセスできない青年は含まれておらず、十分な数値とはいえない。しかし、現状を把握するうえでは有効な資料だと考えている。

在日コリアンの文化的実践とアイデンティティ
—生野民族文化祭に着目して—

文化祭を捉え直し、そこで在日コリアン 2・3 世がいかにかアイデンティティを構築していったのかを考察していった。その結果、在日コリアン 2・3 世たちが「在日コリアン」として自らを再表象し、コミュニティ内の諸実践によって多様なアイデンティティ化を行うという、2つのアイデンティティ構築過程を見出した。田辺はアイデンティティの形成とは、生き方の探求であると述べている [田辺 2003]。生野民族文化祭にかかわった人々は、この実践をとおして未来に向けた生き方を現在も探求し続けている。

本研究での積み残した課題として以下のことが挙げられる。今回インタビューを行った人々は、生野民族文化祭を肯定的に捉え、中心を担った人々であった。そのため、この文化祭を否定的に捉えていた在日コリアンの人、またこれに参加したことでさらに在日である自分を受け入れられなかった人については、対象者を捜すのが困難であったため調査を行えていない。また、終わってしまった出来事を調査する最大の難点は、実践が行なわれている場面それ自体の観察ができないことである。ゆえに身体表現と彼らのアイデンティティ構築との関係性を現場に即して検討することができなかった。これまで在日コリアンの人々のアイデンティティ問題に関しては、歴史観や言語、本名と通名の使用といった視点で多く調査は行われているが、在日コリアン社会の中でも周辺に位置する人々の存在や、彼らが行う身体表現とアイデンティティ構築の関係性については十分な研究が行われていない。今後、博士課程ではこれらの課題を念頭に、今を生きる在日コリアンの若者のアイデンティティ問題に関しさらなる調査と検討を行っていきたいと考えている。

参考文献

飯田剛史

2002 『在日コリアンの宗教と祭り 民族と宗教の社会学』世界思想社

2014 「民族まつりの展開と課題」『民族まつりの創造と展開 上 論考編』、飯田剛史(編)、pp.3-40、JSPS 日本学術振興会科学科研費・基盤研究(C)

稲津秀樹

2006 「在日韓国・朝鮮人運動のカルチュラル・ターンー生野民族文化祭における〈民族〉と〈楽しさ〉」第7回(2006年度)J.C.C.Newton 賞受賞作品、関西学院大学図書館

<http://library.kwansei.ac.jp/profile/jc2006.html>

(最終アクセス日 2015年10月26日)

エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー

2002 『コミュニティ・オブ・プラクティス』、野村恭彦(監)・櫻井祐子(訳)、翔泳社

太田順一

1987 『女たちの猪飼野』晶文社

金徳煥

1985 「民族のマダン(広場)ー生野民族文化祭ー」『月刊社会教育』8, No.344 pp.29-34

1997 「講演録：大阪・生野からのメッセージー生野民族文化祭がめざすものー」『クルパンー塾報 第21号 第52期 (1996年4月ー10月)』、クルパン編集委(編)、pp2-23、現代語学塾

金賛汀

2004 『在日、激動の百年』朝日新聞社

金泰泳

1999 『アイデンティティ・ポリティクスを超えてー在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社

ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー

1993 『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加ー』、佐伯胖(訳)、産業図書

スチュアート・ホール

1999a 「ローカルなものどグローバルなものーグローバル化とエスニシティ」『文化とグローバル化』A・D・キング(編) 山中弘、安藤充、保呂篤彦(訳)、pp.41-66、玉川大学出版部

在日コリアンの文化的実践とアイデンティティ
—生野民族文化祭に着目して—

1999b 「新旧のアイデンティティ、新旧のエスニシティ」『文化とグローバル化』A・D・キング(編) 山中弘、安藤充、保呂篤彦(訳)、pp.67-104、玉川大学出版部

田辺繁治

2003 『生き方の人類学』講談社

田辺繁治、松田素二(編)

2002 『日常実践のエスノグラフィ—語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社

玄善允

2014 「在日の精神史から見た生野民族文化祭の前史—在日の二世以降世代の諸運動と『民族まつり』」『民族まつりの創造と展開 上 論考編』、飯田剛史(編)、pp.41-62、JSPS 日本学術振興会科学科研費・基盤研究(C)

福岡安則

1993 『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』中公新書

梁民基

1985 「猪飼野のマダン劇運動」『新日本文学』1985年1月号 No.448 p43-49

参考資料1 第10回チラシ表・裏



参考資料 2 '99 生野民族文化祭プログラム

10 月 23 日 (土)	PM 3:00~	地域農樂パレード
10 月 24 日 (日)	AM 9:30~	地域農樂パレード
	10:00~	告祀 (고사)
	10:15~	小鼓舞 (소고춤)
	10:35~	小マダン劇 (마당극) 「속임을 당한 도끼비」
	11:05~	民俗あそび大会 (놀이大会)
	11:45~	大農樂 (대농악)
	PM 12:50~	のど自慢・チョゴリファッションショー
	1:50~	大マダン劇 (마당극) 「장승 과 돌할방」
	2:40~	大農樂 (대농악)
	3:30~	강강술래
4:00~	閉会	

※「第 17 回 生野民族文化祭プログラム」をもとに筆者作成

(2015 年 10 月 20 日 原稿掲載承認)